和歌山縣地理史談 全

ル 4
1747

ル 呂 4
1747

坪井仙次郎 編

版權所有

和歌山縣地理史談 全

明治二十二年二月廿七日文部省検査濟
高等小學校地理歴史科生徒用

宮井藏

和歌山縣地理史談凡例

本書ノ紙數ハ四十葉ニ餘ルモ繪圖及ヒ復習用概要ヲ除ケバ教ヘスベキ部分ハ三十葉ニ過キズ且當該市郡ニ於テノミ教示スベキ一段低ク、記ルシタル部分ヲ除カバ一層減ジテ實ニ廿六七葉トナルベシ

一解説ハ各市郡ツヽ纏メタレバ先ヅ總説ヲ教ヘ其ノ次ハ各地ノ都合ニヨリ其ノ地方所屬ノ市郡ニ移リ漸ク遠キニ及ボシ末ニ結論ヲ教フベシ

一解説中一段低ク、記ルシタル部分ハ其ノ市郡ニ於テノミ教フベキモノトス若シ時間アラバ他ノ市郡ニ在リテ之ヲ教フルモ妨ナシ

一若シ地理ノミヲ教ヘンヿヲ思ハヾ史談ニ關スル所ヲ除キ教フベシ廿葉ニ過ギザル簡短ナル本縣管内地理トナルベシ

一市郡等ノ位置及ヒ堺ハ圖ニ就キテ之ヲ教フベシ

一市郡ノ始ニ加ヘタル圖ハ學習ノ助トシ概要ノ部ニ加ヘタル圖ハ復習ノ料ニ供ス且圖ノ大サハ書中挿入ノ都合ニヨリ一樣ノ割合ニアラズ主トシテ各地ノ位地方向ヲ知ルノ助トナシタリ市郡ノ大サニ至リテハ和歌山縣全圖及ヒ卷末ノ地面人口ノ表ニ就キテ之ヲ知ルベシ

一卷末ニ參考諸表ヲ加ヘタレバ時アリテ児童ヲシテ之ヲ熟覽セシメ以テ本縣地理ノ知識ヲ豐カナラシムベシ

一地圖ニ載スル所ノ符号ハ左ノ如シ

例

凡	國界	河川	山脈
	郡界	港	道路
		燈臺	地名

和歌山縣地理史談

位置

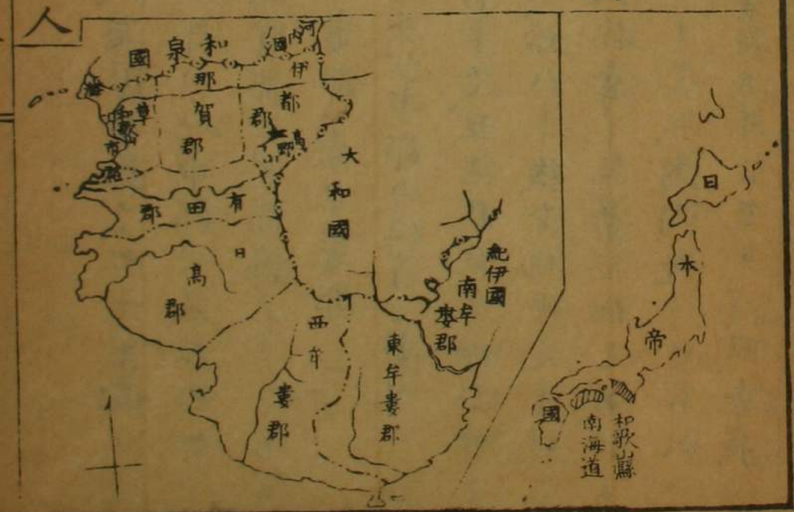
總說

和歌山縣ハ大日本帝國の南海道ニ屬せる紀伊の國の大部分を占む。

概況

和歌山縣の概況

一、地面　三十九万四千六百町餘
一、人口　六十三万千四百人餘
一、地價　二千七百七十七万圓餘
一、國會議員　六人
貴族院多額納税議員　一人



本縣も一市七郡に分れ、海岸の長さ、七十里餘に亘る。海に瀕せざるも一市二郡のみ。市郡の名、左の如し。

和歌山市　海草郡　那賀郡　伊都郡

有田郡　日高郡　西牟婁郡　東牟婁郡

（注意）図に就きて本縣の堺及び市郡の位置を學べ。

此の地も往古、土豪、群居して、互に我意を振ひけるが、神武天皇の、之を征伐し、給ひし後、全地平定しけり。中世に至り、豪民、起りて相掠奪し、乱暴を極めけるが、豐臣秀吉の、之を征服せしより、國内、統一せられて、羽柴秀長の領内に属し、慶長五年に至り、淺野幸長の領地となり、元和五年、淺野氏の、安藝の國に移さるゝに及びて、徳川頼宣、之を領し、其の後、明治維新の日に至るまで、凡、二百五十年の間、徳川氏の領地となりけり。明治四年、七月、廢藩置縣の詔ありて、同年、十月、始めて和歌山縣を置き、南北牟婁郡を除きて、紀伊の國を管轄せしめたり。

位置

和歌山市

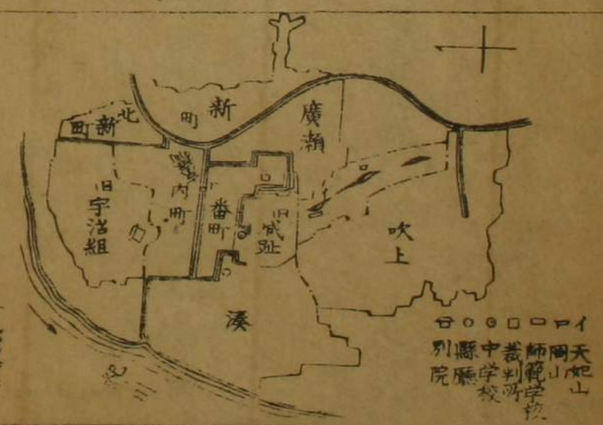
和歌山市も紀の川の河口に近く市街をなし、本縣第一の繁華なる土地なり。

概況

和歌山市の概況

一、地面　三百四十町九反歩　一、町數　四百二町

一、區劃　番町、内町、宇治、湊、
　　吹上、廣瀬、新町、
一、人口　五万五千六百人餘
一、縣會議員　五人
一、首要なる建物　和歌山城、
　　和歌山縣廳、和歌山地方
　　裁判所、和歌山區裁判所、
　　和歌山縣尋常師範學校
　　和歌山縣第一尋常中學校
　　和歌山紡績會社、和歌山
　　織布會社、



（注意）図に就きて本市の堺及び區劃を學べ。

和歌山城

和歌山城は市内の中央、虎卧山にあり。陸軍の所轄地なり。天守閣は高く松柏の間に聳えて壯觀を極む。此の城は天正年間、羽柴秀長老臣桑山重晴をして築りしめ、其の後、紀伊侯、德川頼宣の修築を加へしものなり。當時は規模宏大なりしも、今は其の外廓を悉く市街となしたれば、昔の様を存せず。城内に和歌山縣第一尋常中學校あり

德川頼宣

德川頼宣は家康の男なり。紀伊侯の先祖にして、賢明なる良君なりき。入國の始めより、大に政事に心を用ひ、由緒の正しき神社、佛閣の、衰へたるものあ

ときハ、之を再興し、名族、舊家の、隱れたるものあるときハ、之を扶持し、或ハ池溝を穿ちて灌漑の源を養ひ、或ハ堤を築き、波濤を斥けて新たなる村落を開き、治績の、今ハ傳えしるもの甚多し。後世、南龍公と稱して人の、畏敬する所なり。紀伊侯も明治維新の日まで、十四代繼續しけり。其の中ハて五代、吉宗、宗家を繼ぎて八代の將軍となる學を好み、道を

修め、賢能の士を擧げて、政事を執らしめければ庶民、皆堵に安んじけり。十三代、家茂も亦、十四代の將軍となれり。當時、外國通商の難事ありて、國内騷がしかりしが、其中途にして早世したり

那波道圓

那波道圓は播磨の國、姫路の商家の子にして、德川頼宣に仕へたる儒者なり。幼きより書を讀み、字を寫すことを喜びしかば、父も之を不思議に思い、唯、其の好む所に任せて修業せしめ、十八歲の時、京都に出で、惺窩先生の門に入りて勉勵し、學業、大成して其の名、著れけり。性質、剛直にして、貴權を憚らず直言をなし、常に子弟に向ひて、人の臣たるものは戰場にあり

て八、身を致して國に殉ずべし、泰平の日にありても、死を以て君を諫むべしとこひけるとぞ。頼宣も特に之を優遇して、よく其の諫を容れらきたり。

本居宣長

本居宣長（モトヲリノノブナガ）も享保十五年、伊勢の國、松坂に生れ、皇朝學を以て其の名、遠近に高く、門生、五百人に過ぎ、紀伊侯に仕へけり。幼き日、遊戯を好まずして書を讀むを喜び、人となるに及びて、京都に出で、儒學を學び、醫業を修め、いつれも上達せり。あるとき、友人と會合して、余他日、學問を以て天下に冠らずば再び足下に面を會せじ、といひき。其の後、故郷に歸り、醫を業とし、繁昌しけるが、之に安んぜず、文書を通じて江戸に

住みけり。加茂真淵の教を受け、油斷なく學問を勤めけり。宣長、古事記を皇朝の古傳、古語を存したる最貴き書物なれども、解釋をなしたるものなくして、讀みやすからざるを歎き、大に精力を盡して古事記傳四十六卷を著せり。考證、説明、精密にして、後人の助となること真に鮮からず。

和歌山縣廳

和歌山縣廳は和歌山城の西北にあり、莊麗なる建物なり。

番町

番町は和歌山地方裁判所、和歌山區裁判所、和歌山郵便電信局、和歌山米穀株式取引所等の、集まれる地なり。

京橋

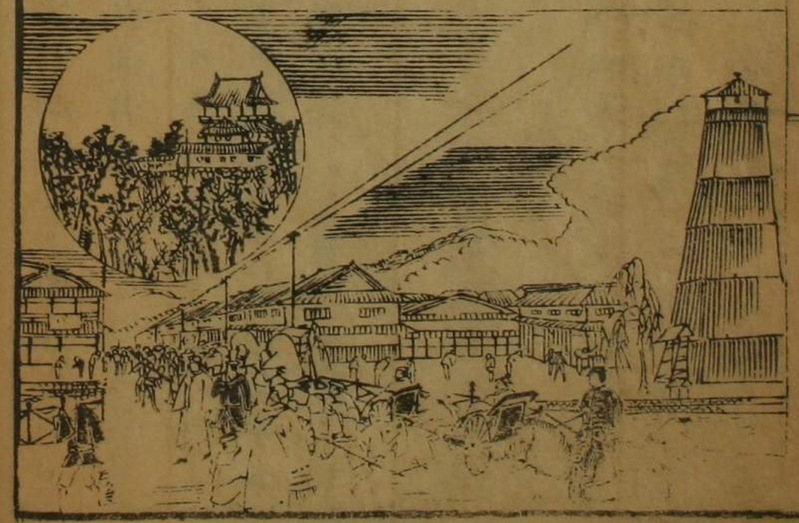
京橋は番町と内町との間にわたせり。其の北詰、

内町

に里程元標を建てたり。内町も商家、軒を連ねて百貨を鬻ぎ、商業繁昌す其の本町も京橋筋にありて特に繁華なり。

本願寺別院

本願寺別院も本町の西にあり。鷺の森御坊と称す。荘厳なる建物なり。天正年間、顯如上人織田信長の兵に苦しめられし舊跡なり。



市場

魚市場及び蔬菜市場も本町の西にあり。商人共、こゝに集まりて、市を開き、頗る雑踏す。

天妃山

天妃山も城南岡公園にあり。紀念碑を建て、明治維新の後、國事に死るし人々の忠魂を表せり。毎年、招魂祭を行ふ。當日も参拝する者、群集して賑もし。近時、また征清記念標を建つ。

岡山

岡山も天妃山の西にあり。和歌山縣尋常師範學校の建つ地なり。

刺田比古神社

其の南麓に鎮座する刺田比古神社も縣社にして、市内第一の社なり。世俗、岡の宮と称す。

行運

河溝、市内に通じて、紀の川に雑賀川に連なり、運

漕の便路を開く。紀の川の河口より漕船の出入あり て、大坂、神戸より渡るべく、又、縣内の各地より寄港して尾張の國、熱田(アツタ)より渡るべし。陸路は淡路街道、大坂街道、龍神街道、熊野街道等、集まりて、四通八達の衢なり。且電信線路ありて、縣外の各地より達し、又、縣内の町村を經て、東牟婁郡より通じ一線は伊都郡に通ず。

職業

市民は商工を業とし、縣内の各地より需要品を供給し、又、材木、綿フラ子ル、建具、等を賣り縣外より販賣す。

物産

綿フラ子ル、雲齋、足袋、草履、建具、鬢附油、傘、酢漬魚、奈良漬、

綿フラ子ル

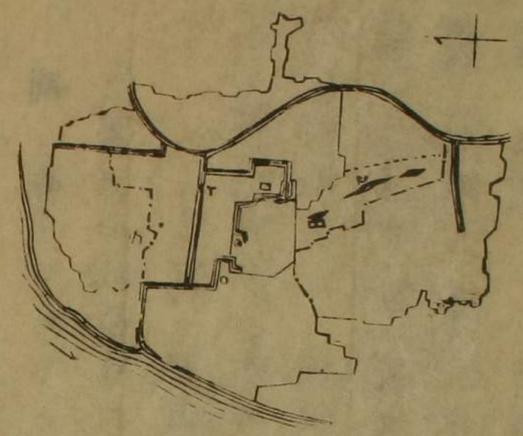
綿フラ子ルは明治六七年の頃より、和歌山市より於て始めて織り出ぶし、今は廣く内國より用ひられ、又、外國へ輸出せらる。一箇年の産額一百万圓以上に達して、著名の物産なり。世間之を紀州子ルと称す。

地理の概要

地面	三百四十町九反歩	人口	五万五千六百人餘
地勢	平坦	氣候	温和
職業	商業 工業		
物産	綿フラ子ル 雲齋 建具 酢漬魚 奈良漬		
行通	大阪神戸航路 縣内各航路 淡路街道 大坂街道 龍神街道 熊野街道		

摘要

和歌山城、和歌山縣廳、和歌山地方裁判所、京橋、内町、本町、天妃山、岡山、



史談の概要

羽柴秀長和歌山城を築く
後陽成天皇 天正十五年、二千二百四十一年

徳川頼宣紀伊の國を領す
後水尾天皇 元和五年、二千二百七十九年

那波道圓徳川頼宣を仕ふ
明正天皇 寛永十一年、二千二百九十四年

吉宗將軍の職を就く
中御門天皇 享保元年、二千三百七十六年

本居宣長生る
中御門天皇 享保十五年、二千三百九十一年

海草郡

位置

海草郡は本縣の西北の地を占む、地勢、平らかなるして、地味肥ゆ。

概況

海草郡の概況

一、地面 二万三千十二町六反歩

一、町村数 二町四十村

一、人口 十二万二千人餘

一、縣會議員 九人

（注意）図に就きて本郡の堺を學べ。

宮村

宮村は和歌山市の東に接す、其の秋月は海草郡警察署の所在地なり、海草郡役所は和歌山市に置かる。

日前宮
国懸宮

官幣大社、日前國懸の兩神宮は秋月に鎮座す、社地廣く幽邃にして、神威自ら嚴なり、由緒最古き神宮かりとす、

天道根命

天道根命は神武天皇に從ひて、軍功を著しゝにより木の國の國造とふされたり、即紀伊の國の國造の先祖なり、

太田城

太田城の趾は宮村の太田にあり、六十四代の國造紀俊連の築きし所にして、天正十三年に至り、豊臣秀吉の兵を受けて落城せり、此の時六十七代の國造紀忠雄兩宮の神靈を守護して、高野山の寺領に隱れ、以て漸く今日あるを得たり。

秋月の北、四箇郷村の新在家に徳勸津宮の舊趾あり仲哀天皇南國を巡り給ひし時に駐まり給ひし宮の跡なり、天正十三年豊臣秀吉、太田城を水攻せし時、此の舊跡も全く流失して、今は僅に其の處を知るのみ。

徳勸津

和佐大八郎

和佐大八郎は和佐村の人にして弓術に達し、貞享三年、京都の三十三間堂に於て其の術を試み高名を天下に揚けたり。

伊太祈

西山東村の伊太祈曾は、國幣中社伊太祈曾神社の

曽神社

鎮座する地ふり、祭神五十猛命も、往昔、樹の種子を携へ來りて、當國に時かれしと言ひつたふ。

武内宿称

武内宿称も、安原村の松原に生れ、景行天皇成務天皇、仲哀天皇應神天皇、仁徳天皇の五朝に仕へ、忠誠比ひかく、功績著しくして、人臣の鑑とかもへき人かり、又、齢三百歳に餘り、長壽を以て、治く國民の知る所なり、此の人に就きて、話をへき事多かれども、其の中にて應神天

皇の御母神功皇后を輔佐し奉りて、三韓を征服せし事、熊襲の亂を平げし事、我が國の大臣の始ふりし事も、最著しき事蹟ふり。

竈山神社

竈山も秋月の南、三田村の和田にあり、彦五瀬命を葬りたる所なり、明治十八年境域を改修し、社殿を經營して、官幣中社に列し、竈山神社と稱せらる。

彦五瀬命

彦五瀬命も、神武天皇の御兄にして、天皇と共に、中州を平定し給ひし時、河内の國孔舍衛坂の戰にて流矢に中り給ひ、遂に紀伊の國雄の水門に至りて、薨せられたり。

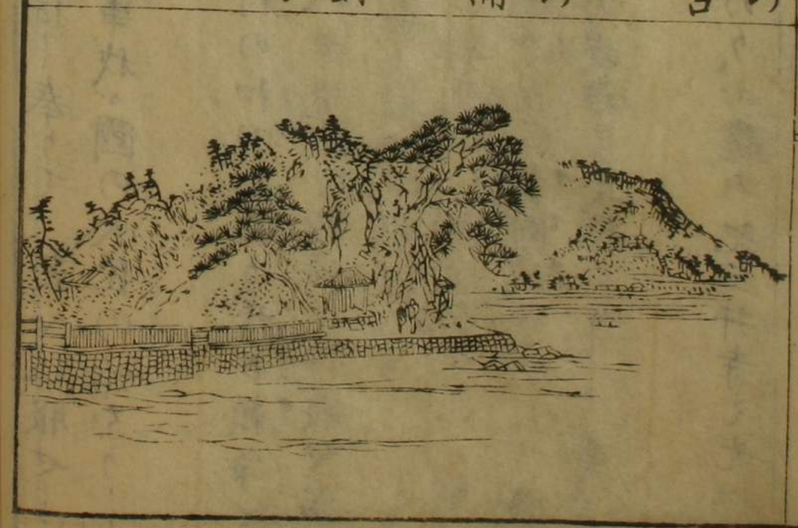
紀三井寺

名艸山も和田の南にあり、山腹の紀三井寺も光仁

天皇寶亀元年唐僧偽光の開基したる所にして最古き霊場の一なり。

和歌の浦

和歌村も本郡の西部の中央にあり、其の和歌の浦も雑賀川の末流と隔てゝ名所山と相對し、風景明朗にして、我が國の著名なる勝地なり、又明光の浦といふ、景色、建物の遊覧をべきもの鮮からず、近時此の近



傍を改修して公園となし、和歌公園と稱す。

玉津島

玉津島神社も、和歌村にあり、有名の古社なり、此の地も、聖武天皇、稱徳天皇、桓武天皇の行幸ありし舊跡にして、由緒、甚古し。

東照社

東照神社、南龍神社も亦和歌村にあり、いづれも社殿莊麗、境内幽邃なり、東照神社は徳川家康を祀り、南龍神社は徳川頼宣を祀る。

雑賀崎

雑賀崎は、和歌村の西南に當りて海中に出でたる岬なり、大嶋、中嶋、双子嶋、其の近海に散在す。

黒江

黒江町は、紀三井寺の南にあり、漆器の産地なり、其の品質、精良にして名聲、世に著る。

日方

日方町は其の南な

接し傘の産地たるを以て名あり、此の地に郵便電信局を置く、共に商工の業の盛なる土地なり。

長峰山脈

長峰山脈も有田郡と本郡との境を走り、那賀郡との境に沿ひて支脈を出だす、其の中の礫が峰、最初が峰あり、又本郡の南部に於て別に藤白山脈を出だす、

藤白山脈

藤白峠、其の中にあり、元と熊野街道も、此の峠にかゝりしが、今も其麓をまはりて新道を開きたり。

鈴木氏

鈴木氏も、代々藤白に住し、著名の舊家なり、文治年間、三郎重家及び其の弟、亀井六郎重清、源義經に従ひて軍功を顯し、遂に奥州衣川に於て、戰死を遂けたりき。

塩津浦

塩津村も藤白の西にあり熊野新街道に當れり、塩津浦も海水深くして大船を泊するに足り、又和歌山市と小蒸滊船の航通頻繁なり。

下津浦

下津浦及び大崎浦も、塩津浦の西南にあり、何れも船舶の碇泊に便なる良港なり。近時此の兩浦に船渠を設くるの計畫あり。

大崎浦

荒崎

荒崎も、大崎の西に汁出して岬角をなす。

長峰山脈も藤白山脈との間を総稱して、加茂谷と

加茂谷

小南

ふ。加茂、仁義濱中等の諸村此の中にあり、加茂村の小南も、多く梅を栽培す。濱中村の長保寺も、古刹にして境内廣く、紀伊侯累代の菩提所なり。

長保寺

椒

椒村も、濱中村の西にあり、有田郡の堺に接す。浦の初嶋其の西方の海中に碁布す、其の大なるものを、地の嶋、沖の嶋の二つとし数多の小嶼之に屬す。

紀の川

紀の川も、那賀郡より來り本郡と南北の二つに斷ち、和歌山市に沿ふて海に入る、灌漑の利運輸の便共に大なり

雜賀川

雜賀川も、紀の川の岐流よりして、和歌山市を横ぎり、本郡の中部を流れて、頗る運漕の便を助く。和歌山市より塩津に通ふ小蒸瀛船も此の川を過ぐるなり。

雄の港も、紀の川の末流にあり、水淺くして大船の出入に便ならざるも、和歌山市より諸方に通ずる要港なるを以て、商船の出入常に多し。

鳴瀧

鳴瀧も、本郡の北部有功村の薗部にあり、清泉、岩石の間を流れ、楓樹、崖に沿いて枝を交え、紅葉の勝地たるを以て名高し。

鈴木孫市

鈴木孫市は平井の人にして、織田信長に抗し諸所の戰に於て勇名を著せしが、後、羽柴秀長に仕へたり。

大同寺

六十谷の大同寺も、大同年間、僧傳教の草創した所にして著名なる古刹なり。

直川

直川は有功村の東にあり、本惠寺と稱する古刹此の地にあり、高燥にして風景最佳なり、俗に之を

府中

直川の觀音寺といふ、

紀伊村と直川村の東にあり、其の府中も、中世國府を置きし地なるを以て、今に、此の名を傳ふ。

葛城山脈

葛城山脈も本郡の北の境を走る、其の雲山が峰を最高くして、近海を航する者の目標とする所なり、一名を雨の森と稱す、其の東の雄の山も、大阪街道に當れり、坂緩かにして車を通ずべし、

境橋

瀧畑の境橋も此の街道の紀、泉兩國の堺にかゝれり。

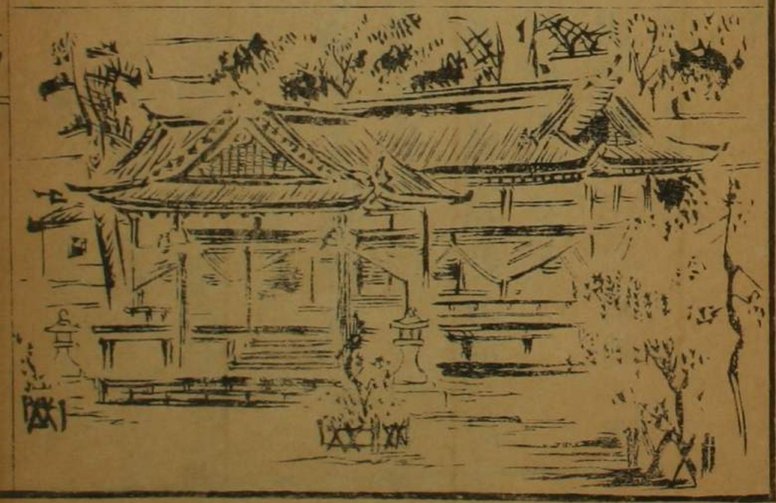
加太湾

本郡の西北の端に斗出したる二つの岬角あり、一を城が崎といひ、一を飽浦崎といふ、此の二岬に依りて衛らるゝものを加太湾とも、加太浦とも此の湾の頭にあり、古來、南海の官道なりしを以て、其の名廣く聞ゆ、今、尚、四國往來の要港たり、此の地の淡嶋神社も、著名の古社にして參詣の人多し。

淡嶋神社

友が嶋

友が嶋も、加太湾の外に峙ち、淡路嶋と相對す、一名を苫が嶋といふ、其の陸に近きを地の嶋といふ、其の西ふるを沖の嶋とよび、岩



石種々の姿を現もして頗る奇觀あり、又遠嶋、神嶋の嶋嶼あり、沖の嶋にも燈臺を設く、第三等不動白色の點火かり、又此の嶋に砲臺の設あり、加太浦の深山砲臺と共に護國の要害とす。

木本八幡

木本八幡神宮も、加太浦の東ふる西脇野村の西の庄にあり、應神天皇の頓宮の遺跡ふり。

淡路街道

淡路街道も、本郡の西北の部に通し、和歌山市より、北嶋橋を渡り、野崎、松江を經て、加太に至る、

大坂街道

大阪街道も和歌山市より出で、紀の川の南岸に沿ひて東に赴き、田井の山を踰え、瀧畑を過きて和泉の國に入る。

大和街道

大和街道も、紀の川の南岸に沿ひて東に赴き、田井の瀬橋を渡らもして直行し、那賀郡に入る。

龍神街道

龍神街道も、本郡の中央部を斜めに貫き、秋月、岡崎伊太祈曾を過きて那賀郡の境に達す。

熊野街道

熊野街道も、本郡の中央部より雑賀川に沿ひて南に赴き三葛、紀三井寺、黒江、日方、名高を經て藤白峠の麓をめくり、塩津、濱中、椒、を過きて有田郡に出づ。

沿革

本郡も、もと、海部、名草の二郡に分屬したる地ふり、明治十二年郡區改正の時、海部郡の一部、由良一帶の地を割きて、日高郡に編入し、又二郡の中、市街地に屬するものを割きて和歌山市を獨立せしめしが明治

二十九年に至り、更に二郡を合せて一つとなし、海草郡と稱す。

職業　郡民は農及び漁獵を業とし、一部は商工業に從事す。

物産　物産

穀類　木綿　橘類　菜種　黒江の漆器　日方の傘　和歌浦の海苔及び牡蠣　三葛の食塩

雑賀崎の鯛　山東の松簟　松江の西瓜　加太浦の裙帶菜（ワカメ）

地理の概要

秋月　日前宮　國懸宮　伊太祈曽神社　竈山神社

紀三井寺　和歌の浦　玉津嶋神社　東照神社　南龍神社

雑賀崎　黒江　日方　塩津　大崎　加茂谷　長保寺

紀の川　雑賀川　雄の港　長峰山脈　藤白山脈

葛城山脈　雲山ヶ峰

雄の山　加太浦　友ヶ嶋

浦の初嶋

摘要

地面　二万三千十二町六反歩

人口　一万二千人餘

地勢　平坦　南部稍嶮し

氣候　温和

職業　農業　漁業

普通物産　穀類　菜種　木綿　橘類　海産物

著名物産　漆器　傘　食塩　松簞　西瓜　海苔　鯛

行通　淡路街道　大坂街道　大和街道　龍神街道　熊野街道

史談の概要

彦五瀬命薨去す　紀元前三年

武内宿禰生る　景行天皇九年　七百三十九年

太田城の水攻　後陽成天皇天正十三年　二千二百四十五年

和佐大八郎弓術を試む

霊元天皇貞享三年　二千三百四十六年

位置

概況

那賀郡

那賀郡も海草郡の東に接す。地勢、北も平らかなれ

て、南も山多し。地味、肥ゆ。

那賀郡の概況

一、地面　三万六千五百十八町四反歩

一、町村数　一町三十五村

一、人口　八万四千餘

一、縣會議員　五人

（注意）圖に就

清水

紀の川

根来寺

きて本郡の堺を學べ。

岩出村の清水も紀の川の北岸にあり那賀郡役所、那賀郡警察署の所在地にして又郵便電信局の設あり。

紀の川も伊都郡より來りて本郡を南北に斷ち、草郡に流る。灌漑の利、運送の便あり。

根來寺も清水の北、西坂本にあり、新義真言宗の本山なり。境内廣くして多く櫻を植ゑ、風景佳し、花の頃に、ハ遊覽する人、來集す、

始め、覺鑁上人、新義真言宗を唱へ根來寺を建てて、こゝに居られしが、後、新義真言の僧侶、高野山より移り來て、一山繁榮を極めけり。天正十三年に至り豐臣秀吉に抗し、遂に破られて、堂宇、多く兵火に、かゝり、一時に灰燼となりき。世に根來塗と稱して、珍重する漆器も、根來寺の繁榮なりし頃、此の地方に於て作りし品なり。

覺鑁上人

覺鑁上人も肥前の國、藤津の人にして、高野山及び、京都の東寺に於て佛教を修め、學識博く、道德、高き名僧なりき。謚號を傳教大師と稱す。

境谷

山崎村の境谷も紀泉の國境なり。鑛泉、涌きて浴場を設けたり。

鳥城山脈

葛城山脈も東西の方向に走りて、本郡の北の堺を圍む。

粉河町

粉河町は清水の東にあり。本郡の最繁華なる地にして、郵便電信局の設あり。商工の家、多く集まり、營業盛なり。其の粉河寺は光仁天皇、宝亀元年、大伴孔子古の創建せし著名の古刹にして、參詣する人多し。

龍門山

龍門山も本郡の中央に聳ゆ。其の形の富士山に似たりとして紀州富士と称す。又勝神山の名あり。麻生津、飯盛の諸山に連なりて、高野山脈の一つに属す。長峰山脈も本郡の南の堺に走る。

野上川

野上川は伊都郡に發源し、本郡の南部を西へ流れて、西境に近づき、北へ曲りて紀の川に注ぐ。此の川の下流の沿岸の地は貴志と称す。木綿を産して名あり。東貴志村の井の口、安樂川村の市場は此の地方の良部落なり。

津田監物

津田監物算長は小倉村、吐前の人にして、砲術の達人なりしが、足利義晴に召出だされて高名、天下に轟き、子孫、長く其の業を継ぎけり。

大和街道

大和街道は海草郡より來り、紀の川に沿ひて東に赴き、清水、東野、名手を過ぎて、伊都郡に通ず。又東野より分れ麻生津を經て、伊都郡に入り、高野山に達する路あり。

龍神街道

龍神街道も亦、海草郡より來り、野上川を縫ひて、東南に向ひ、動水、神野を過ぎて、有田郡に出づ。

職業
物産

郡民も農を業とす。

物産

穀類　菜種　粉河の酢、蒟蒻及び團扇　貴志の木綿
野上の棕櫚　神野の紙　紀の川の鮎

—地理の概要—

清水、粉河、貴志、
根來寺、葛城山脈、
龍門山、紀の川、野上川、

摘要

地面　三万六千百五十八町
四反歩

人口　八万四千人餘　　地勢　北部平坦　南部嶮—

氣候　温和　　職業　農業、

普通物産　穀類　菜種

著名物産　酢　蒟蒻　團扇　木綿　鮎

行通　大和街道　龍神街道

—史談の概要—

大伴孔子古、粉河寺を創建す　光仁天皇宝亀元年　千四百三十年

覺鍐上人（長承保延年間の人）

崇德　天皇長承元年　千七百九十二年

豊臣秀吉、根來寺を攻む　正親町天皇天正十三年　二千二百四十五年

伊都郡

伊都郡は本縣の東北の隅なり。地勢、紀の川に沿ふ所は平らかにして、地味、肥え、其の餘は山、嶮し、東南の方は山勢、特に嶮惡なり。

伊都郡の概況、

一、地面　四町一反歩　四万六千二十

一、町村數　一町村　二十一

一、人口　五万九千八百

人餘　縣會議員　五人

（注意）図に続きし本郡の堺を學べ。

橋本（ハシモト）は紀の川の北にあり。伊都郡役所伊都郡警察署の所在地にして又郵便電信局の設あり。

紀の川は大和の國より來りて、本郡を南北に斷ち那賀郡に入る。郡内の繁華なる村落は此の流れに沿ひて碁布す。

霜草（スダ）　紀見村の細川、隅田村の霜草、山内に、煙草を産す。霜草煙草と称して世に知らる、もの（ものしり）。

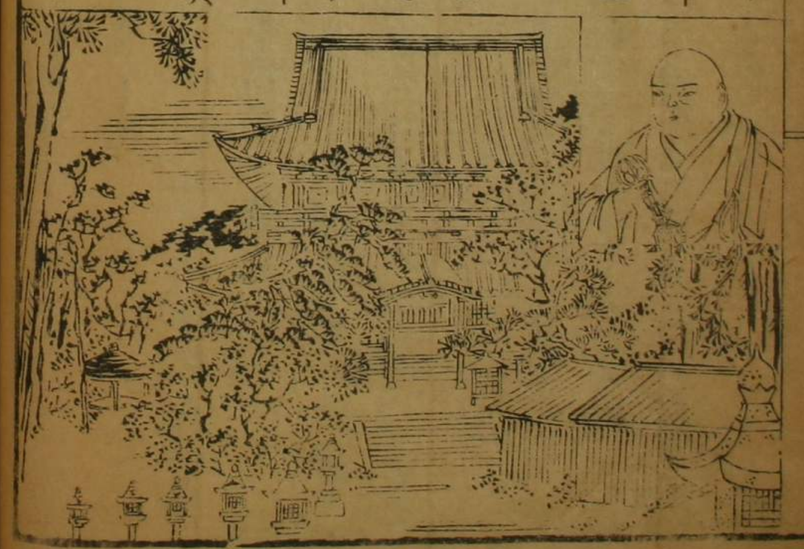
山峯（ミネ）　待乳山（マツチヤマ）は山内の東、大和の國との堺に起ち、紀見峠（キミトウゲ）、三國峠（ミクニ）、父鬼峠（オニ）は葛城山脈の中にあり。

妙寺

妙寺も本郡、河北の西部
にあり。妙寺區裁判所の所
在地にして、賑もしき土地
なり。

高野山

高野山も本郡の南境に
近く聳ゆ。高山、其の四方を
圍み、高野山脈の中心にし
て、西へ向ひ、龍門山脈、長峰
山脈、等を支出す。絶頂に曠
原を敷き寺院、門を連ねて
建ち、清淨なる靈區にして



高名、天下に隱れなし。明治元年の頃までも女人の登
山をもとを禁じたりき。山中に勝地、舊地、甚多し。金剛
峰寺も弘仁年間、空海の開基せし所なり。奥の院も空
海入定の地にして、信徒の參詣する者、常に跡を絶た
ず。

空海

空海も讃岐の國の人にして、若き頃より佛教を學
び、桓武天皇の御宇、延曆年間、支那に渡りて、其の教を
研修し、歸國の後、金剛峰寺を創建し、又、廣く國中を巡
りて、巧みに説教せしむ、都鄙の貴賤、喜びて之を信
仰し、佛教、廣く世に行もるくに至りけり。空海も佛教
に達したるのみならず、百般の學識に富み、至る所

七霞山
丹生川
九度山
昌幸

よって、醫藥、温泉、水利、等の事を教へて、諸人に利益を與へしつむ、愈々、信仰を得たりき。又、書画の名人にして、佛像の彫刻に妙を極め、實に博學多能の名僧なりき。今日、我が國に於て洽く用ふるいろはも、空海の作りしものなりといふ。養和二年、高野山の奥の院に於て入定したり。謚號を弘法大師といふ。

七霞山は高野山の東に抽んづる高嶺なり。

丹生川は高野山の西麓に發源して、北へ流れ、紀の川に注ぐ、下流の北に九度山村あり、其の九度山の善名称院に蟄田唱策、蟄田幸村の退隱せし地なり。昌幸は武田信玄の家臣なりしが、後、此の地に退きて老死し、其の子、幸村は武勇に秀で智謀に富みしが、豊臣秀頼の招きに応じ、大坂城に入りて徳川家康と戰ひ、敗死したり。

丹生津比賣神社
五里谷川等
大和街道
高野街

縣社、丹生津比賣神社は天野村にあり。郡内、屈指の舊社なり。

五里谷川は高野山の南に發源し、西南へ流れ、有田川の上流をなす。湯川、友淵川は皆、高野山の西麓に發源し、共に那賀郡に入りて、野上川に集まる。

大和街道は那賀郡より來り、紀の川に沿ひ、妙寺、橋本を歴て、大和の國に通ず。

高野街道は紀見峠を越えて、河内の國より來り、橋

道　本、學文路と過ぎて、高野山に至る。又、本郡の西境、麻生津峠を越えて那賀郡より通ず、花坂を歴て、高野山に達する路あり。

職業　郡民は農を業とす。

物産　穀類　菜種　橘類　木綿　紙　木炭　棕梠　檜繩　霜草煙草　高野山の材木及び氷豆腐

地理の概要

橋本、妙寺、霜草、高野山、紀見峠、紀の川、丹生川、

摘要

地面　四万六千四百二十四町一反歩

人口　五万九千八百人餘

地勢　紀の川沿岸平坦其の餘は山地

氣候　平坦なる地温和　山地稍々寒冷

職業　農業

普通物産　穀類　茅種

橘類　木炭　木綿

著名物産　材木　氷豆腐　煙草

行通　大和街道　高野街道

史談の概要

弘法大師（延暦年間の人）

真田幸村（慶長年間の人）

桓武天皇延暦元年　千四百四十二年

後陽成天皇慶長元年　二千二百五十六年

有田郡

位置

有田郡は本縣の中央の地を占む。地勢西は平らゝゝして、東は山、峻し。地味、概ね肥ゆ。

概況

有田郡の概況

一、地面　二万三千九百四十七町歩

一、町村數　一町二十村

一、人口　六万七千九百人餘

一、縣會議員　五人

湯淺

（注意）図に就きて本郡の堺を學べ。

湯淺町は廣湾の頭にして市街をなす。有田郡役所、有田郡警察署の所在地なり。又、郵便電信局あり。水陸運輸の便備もりて商家、多く集まり、營業繁昌す。

湯淺氏

湯淺氏は代々此の地に住み、寛喜年間、威勢遠近に振ひけり。湯淺定佛（ヲヂヤウブツ）も元弘年間、楠正成（クスノキマサシゲ）と戰ひて、其の名、聞えたり。

廣湾

廣は湯淺の南に撓む。人家、稠密なる村落なり。廣湾は深く陸地に侵入し、鷲嶋（メカシマ）・苅藻嶋（カルモシマ）、其の内にあり。

菊池溪

栖原（ヤハラ）は湯淺の西北にあり。菊池溪琴は此の地の人

田村
千田
中山脈

よりて、勤王の志、厚く、王事に奔走し明治維新の後、其の功を賞せられて、金幣、銀盃を賜はりき。

田村も掘原の北にあり。多く枇杷を栽培す。千畑も縣社、須佐神社の鎮座する地なり。

中山脈も水郡の西部を廻りて海岸に從ひ、西北に走る。其の西端の海に突出したる岬を宮崎とよぶ。

有田川
北濱

岩石峙ちて廣灣の北を圍む。

有田川も伊都郡の九里谷川に受けて、水郡の東北隅より來り、沿岸の地方に灌漑の利を與へ、西へ流れて海に注ぐ。

北濱も有田川の河口の北岸にあり。水郡の物産と多く此の地より船積して、各地に送らる。箕島も北濱に接し、人家の多く集まれる村落なり。

田中善吉

箕島の農、田中善吉も元文年間、薩摩の國より櫨樹を移植し、藩主の保護を得て、普く之を廣め、國産を興さんとを計りしが、當時いふ所を信ずる者なく、甚きも其の栽培を妨ぐるに至りしも、之に屈せず、尚手を盡して蕃殖を計りけるが、人漸く利益あるを知りて、終に國産の一つとなるに至りたり。明治七年、善吉の功を追賞して、其の子孫に金員を賜はりき。

長峰山脈

長峰山脈も水郡にあり。性石の峰も其の東に高く抽んづ。

金屋
徳田
次の瀧

金屋、徳田も湯淺の東北にある良部落なり。有田川を隔てゝ相對す。徳田の大乘寺も著名の古刹なり。次の瀧も金屋の東北、縫坂の山間にあり。奇石、群り起ちて之を衛り、高さ三十七丈餘あり。此の地、眺望も亦、甚佳し。其の壯觀、東牟婁郡の那智の瀧に次ぐを以て此の名ありといふ。

明恵上人

明恵上人も石垣村の人にして、山城の國、栂尾に高山寺を開基して住みけり。上人、始めて栂尾に茶園を開き、其の後、くまなく之を同國、宇治に移植しけり。紀伊の國の茶も亦、上人の種子を賦ちしより始まりしなり。

石垣村
以東

石垣村より東の方も山、累なりて、地盤、高く、地味、瘠せて穀類を作るべからず。通常、茶、紙、を製出す。近年、三椏を栽培して製紙の原料とす。

城が森

城が森の山脈も本郡の南境を圍み、郡内に多く支脈を出だす。濁が瀬峠も此の山脈の西部にあり。

熊野街道

熊野街道も海草郡より來り水郡に入りて、箕嶋を過ぎ、有田川を渡り湯淺を經、鹿が瀬峠を越えて、日高郡に通ず。近時、鹿が瀬峠の西に新道を開きたり。

龍神街道

龍神街道も那賀郡より來り、八幡村の清水を過ぎ、城が森を歷て、日高郡に入る。

職業

郡民も農を業とす。沿海の地にても漁業を營む。

物産

蜜柑

穀類　蜜柑　木炭　櫨實　茶　紙　海産物

湯浅の醤油　箕嶋の蠟燭　田村の枇杷

正親町天皇の御宇、係我村、中番の人、伊藤孫右衛門、始めて肥後の國、八代より蜜柑を移植せしに、地味よく適し、枝葉繁り、其の實、色麗しく、味、良くして、大人の嗜好に合ひければ、次第に多く栽培して、今日の盛況に達したり。近郡にも亦、蜜柑を産すれども、本郡所産の品を本場蜜柑と称して、味、特に美なり。

地理の概要

湯浅、廣、北湊、箕嶋、長峰山脈、城が森山脈、有田川、次の龍、

摘要

地面　二万三千九百四十七町三反歩

人口　六万七千九百人餘

地勢　西部平坦　東部山峻

氣候　西部温和　東部稍々寒冷

職業　農業　漁業

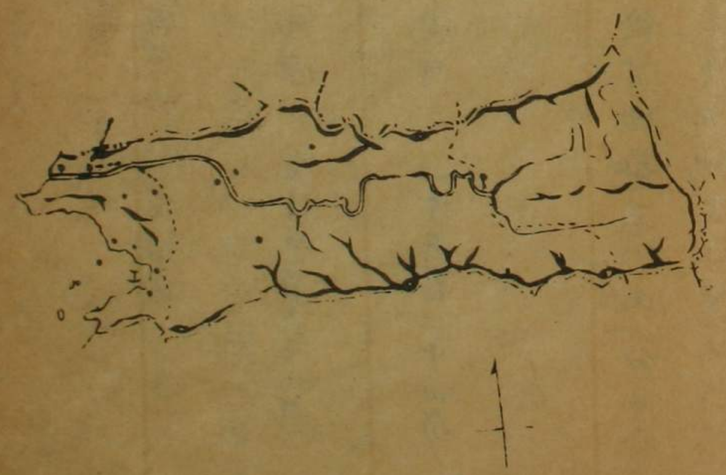
普通物産　穀類　櫨類　木炭

海産物

著名物産　醤油　蠟燭　茶

紙

行通　熊野街道　龍神街道



史談の概要

伊藤孫右衛門（永禄元亀年間の人）　正親町天皇　永禄元年　二千二百十八年

田中善吉　（元文年間の人）　櫻町天皇　元文元年　二千三百九十六年

菊池溪琴　（元治慶應年間の人）　孝明天皇　元治元年　二千五百二十四年

位置

日高郡

日高郡は有田郡の南に接す。地勢、三つの谷に分れ、近海の地は概ね平らかにして、内地は山、累なりて甚

概況

日高郡の概況

一、地面　七万十四町六反歩

一、町村數　一町三十六村

一、人口　八万八千五百人餘

一、縣會議員　五人

（注意）図は就きて水郡の堺と學べ。

御坊町

御坊町は本郡の西北の地にあり。日高郡役所、

嶮し。地味、平地は肥え、山地は穀類に適せず。

日高郡警察署、御坊區裁判所の所在地なり。又、郵便電信局あり。

日の岬

日の岬を御坊町の西より當りて、遠く海中より突出し、海面を抜くこと、三十五丈より過ぐ。御崎神社、其の頂に鎮座す。燈臺あり。第二等回轉白色の燈火を點ず。

徳本

徳本を宝暦年間、志賀村に生れ、高名なる念佛行者なりき。

由良の港

由良湾は本郡の西北の海岸に侵入す。其の頭に由良の港あり、水深くして大船を泊すべし。興國寺は覺心の開基せし著名の古刹なり。覺心は諡號を法燈國師と称して、當時の名僧なりき。

白崎等

白崎も由良湾の北に突出し、小浦崎は其の南を圍む。白崎の南、海中にある嶋を海驢嶋といふ。

城が森山脈

城が森山脈は水郡の北境を走る。白馬城が森、護摩壇は其の中の高嶺なり。又東南へ赴き、大和の國との堺を分ち、更らに西へ折れて、西牟婁郡との堺を走り、終に海濱に出づ。虎が峯、笠塔の峯は西牟婁郡との堺に聳え、和田峠、鉢尖が嶽は大和の國との堺に抽んづ。

日高川

日高川は水郡の東隅に發源し、御坊町の南に於て海に注ぐ。路程、二十里の間に屈曲して、四十里餘の長流をなす。水勢、激しくして、間々瀧の如き所あり。之を日高川の五つ瀧と称す。筏を下だす者の難所なり。舟

と通ずるも末流、七里の間に止まれり。此の川の流域を日高川の谷とす。

湯川氏

御坊町の北、丸山に亀山城の趾あり。湯川氏の居りし所なり。其の中にて政春直光、直春の名、世に聞えたり。

道成等

道成寺と矢田村の鐘巻とあり。大宝年間、文武天皇の、紀道成に勅して、創建せし著名の古刹なり。

山路

本郡の東部を山路と称す。深山の地にして材木、木炭、茶、等を産す。

龍神の温泉

龍神の温泉と龍神村とわく。其の地、高山の間にあれども、大なる旅舎ありて、浴客、遠近より來る。

切目川

切目川も本郡の中央の山間に發源し、西北へ流れて、海に注ぎ、切目川の谷を構へり。御坊の南なる此の谷の中の良村落なり。

虎が峯山脈

虎が峯山脈も本郡の南境より出でゝ西へ走り、日高川の谷と切目川の谷とを隔て、其の末、海濱へ乱走す。其の中に清冷峠、矢筈嶽、最高く抽んづ。真妻山脈も其の支脈にして西南へ赴き、切目川の谷と南部川の谷とを隔つ。

南部川

南部川も清川村の山間に發源し、西南へ流れて、海に注ぎ、南部川の谷を構へり。其の河口に南部の村落あり。

熊野街道　熊野街道と鹿が瀬峠を越えて、有田郡より來り、御坊、印南、南部を過ぎて、西牟婁郡に通ず。

龍神街道　龍神街道も城が森を越えて、龍神村に至る。

職業　郡民も農を業とす。沿海の地に於ても漁業を營む。

物産　穀類　材木　水炭　茶　海産物　藤井及び嶋の紙　龍神の檜笠

地理の概要

御坊町、山路、由良の港、日の岬、龍神の温泉、城が森山脈、虎が峯山脈、日高川、切目川、南部川、

摘要

地面　七万千四十七町六反歩

人口　八万八千五百人餘

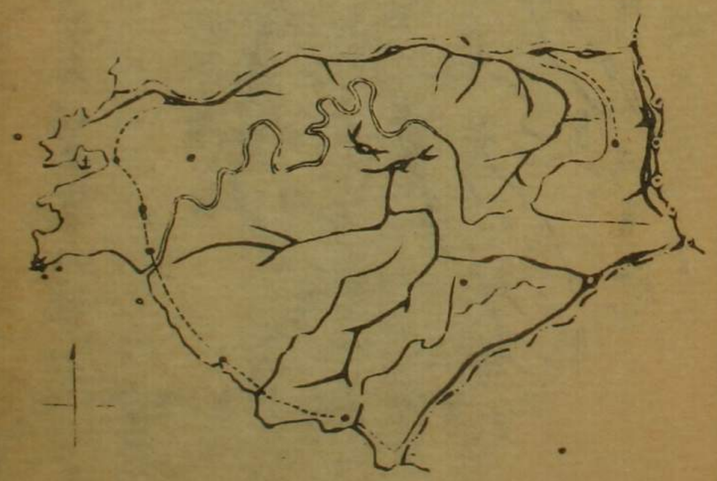
地勢　嶮峻

氣候　近海の地温和　山地稍〻寒冷

普通物産　穀類　材木　水炭　茶　海産物

著名物産　紙　檜笠

行通　熊野街道　龍神街道



西牟婁郡

位置

西牟婁郡は本縣の南部を占む。地勢、山、峻くして、平地甚だ少なし。海岸は岬灣出入して、嶋嶼多く碁布す。地味、良らず。

概況

西牟婁郡の概況

一、地面　八万七千六百五十一町五反歩

一、町村数　一町四十一村

一、人口　八万五千四百人餘　〔縣會議員　五人

（注意）図は就きて本郡の堺を學べ。

田邊町

田邊町は田邊湾に臨み、秋津川の下流を跨がりて市街をなす。和歌山縣第二尋常中學校、西牟婁郡役所西牟婁郡警察署の所在地なり。又和歌山地方裁判所田邊支廳、田邊區裁判所及び郵便電信局あり。海に臨む瀛船の航路と開き、陸に街道集まりて、商業繁昌を極む。縣社闘雞社の東端にあり。

田邊城の跡

此の地は田邊城の趾あり、元和年間、徳川頼宣の、紀伊の國を領せしときに當り、安藤直次の居城たりき。其の後、明治維新の日まで、安藤氏代々、こゝに居りけ

う。

安藤直次

安藤直次も三河の國の人よりて、徳川家康に仕へ、勇猛剛直なりき。後頼宣の守役となされけり。頼宣若き頃、粗暴よりて怒り易く、動もすれば刀の鞘を振りて近侍の者を打ちき。あるとき直次急に入りて両手を以て頼宣の膝を扼せりに、頼宣、痛みに堪へずして、ゆるさんとと請ひき。直次諫めて曰く、近侍の者、若し罪あらば臣に命ぜらるべし、必ず自ら手を勞せらるべからずと。頼宣、漸く手をゆるせば衣服、やぶれて股に疵を卿しけり。後日に至り、頼宣も其の疵の、消えんとを恐れて、浴湯のときも心を用ひて之を守りしとぞ。

熊野別當湛増も田邊に住みて、又田邊の別當と称し、第二十一代の別當なりき。治承年間源平の戰ひに出で、其の名、世に知られたり。

辨慶も田邊に生れ、幼少の間、本宮に住みけりと傳ふ。後、源義經の家臣となり、智勇、勝れて、忠義厚き人なりき。

瀬戸崎も田邊湾の南を衛る。湾内に多くの小港あり。皆、舟を泊するによし。

湯崎の温泉も瀬戸鉛山村にあり。風景、頗る佳し。昔、齊明天皇を始め奉り、代々の天皇の、行幸ありし地なり。現今、浴客、四方より來る。

冨田川

冨田川は本郡の北境より發源して、南へ流れ、冨田に至りて、海に注ぐ。末流、九、二里の間、舟を通ずべし。上流は流材の便を與ふるに過ぎず。

大坂峠等

此の川の東に於て大坂峠、十丈峠、相、續きて山脈をなし、大和の國に亘る。其の中に安堵が峯、最高し。又、西へ向ひて支脈を出だし、日高郡との堺を隔つ。笠塔の峯、其の間に抽んづ。竹藪及び麥粉の森、十丈峠の西南に連なりて、冨田坂となり、其の末、海濱に達す。

安宅川

安宅川は本郡の東北隅に發源し、西へ流れ、日置浦に至りて、海に注ぐ。末流、九、六里の間、舟を通ずべ

置浦は舟を泊するによし。

大塔の峯

大塔の峯は東牟婁郡との堺に聳ゆ。縣内、第一の大山にして、東西牟婁郡の山脈の中心をなす。其の本郡に來りて、安宅川の東を走る山脈は法師が峯、三日の森、半作峠等の高峯あり。其の末、終に日置、周蔵、見、二村の間に於て海濱に出づ。

串本浦

串本浦は本郡の東南端にあり。海峡を隔てし、東牟婁郡の大島と相、對す。郵便電信局あり。漁船の寄港する地なり。

二色の浦

其の西の二色の浦は海水、深く陸地に入りて袋の如き狀をなす。故に、又、袋の港といふ。港内、常に靜

穏なり。

潮の岬

潮の岬も串本の南よりあり。海よ突出すること、幾ばくか里よ及ぶ。南海の大岬よりして本縣の南端なり。其の邊、潮流急よりして波、高く、渡海の難所とす。岬よ燈臺を設く。第一等不動白色の燈光を發す。

熊野街道

熊野街道も日高郡よりの來りて、田邊町よ入る。

中邊路

此の地よて分れて、中邊路、大邊路の二つとなる。中邊路も秋津川よ沿ひて東北へ赴き、上三栖、栗栖川、近露を過ぎて、東牟婁郡よ通ず。大塔の峯の西を回ぐるなり。

大邊路

大邊路も海よ沿ひて東南へ向ひ、高瀬を過ぎ、富田坂を越え、安居、周參見を歴、馬轉坂、長柄坂を越え、和深、江住、田並を歴て、東牟婁郡よ入る。大塔の峯の南及び東を迂回するなり。周參見よりも郵便電信局あり。又、漁船、時々、寄港す。和歌山市、田邊町の間て一二の難所あれども、道、概ね平らかよして、車を通ずべきも、田邊町より東南よ進みても、山、高く、坂、嶮しくして、旅行、極めて難澁なり。

職業　郡民も農を業とし、海に臨みたる地にありても大に漁業を勤む。

物産

穀類　甘藷（サツマイモ）　材木　木炭　櫨實（ハゼノミ）　松煙

海産物　田邉の葛粉　冨田の砥石

甘藷　甘藷も穀類に次ぎて廣く作られ、東西牟婁郡の村民の重要食物の一つなり。本郡西の谷の安宅川弥助、曾て之を作りしが、廣く用ひらるゝに至らざりき。慶應（ケイオウ）三年に至り、同地の植松弥助、阿波の國より、九州芋と称する一種の甘藷を移植試作せしに、其の質丈夫にして、燒酎の醸造にもよく繁茂し、且收穫も多かりしゝを、之を郡内にひろめて、公共の利益を得んを計りしも、其の形狀、食味の在來の品と異なりたるを以て、有毒なりなどいふ者ありて、始めは意の如くならざりしが、之に屈せず、心を盡して、勸誘せしゝむ漸く信用を得て、今は、熊野芋と称して廣く作られたり。明治十九年、弥助の功を追賞して、其の子孫に木杯を賜へりき。

地理の概要

田邉町、串本浦、瀬戸岬、潮の岬、湯崎の温泉、大塔の峯、冨田川、安宅川、

摘要

地面　八万七千六百五十町歩

人口　八万五千四百人餘

地勢　山峻

氣候　海邊温和　山地稍〻寒冷

職業　農業　漁業

普通物産　穀類　甘藷

材木　木炭

著名物産　葛粉　砥石

行通　熊野街道（中邊路　大邊路）

——史談の概要——

湛増（治承年間の人）　高倉天皇　治承元年　千八百三十七年

安藤直次（元和年間の人）　元和元年　二千二百七十五年

後水尾天皇

植松弥助、九州芋を移植す　慶應三年　二千五百二十七年

今上天皇

位置

東牟婁郡

東牟婁郡は本縣の東隅にあり、地勢、嶮峻なり海岸は甲湾多く出入して、無数の島嶼碁布す。此の地方は

古來、山水の景色の、奇絶なりと以て名を知らる。

概況

東牟婁郡の概況

一、地面　十万六千百一町八反歩

一、町村数　一町三十村

一、人　口　六万七千七百餘

一、縣會議員　五人

（注意）図は就き

て本郡の界を學べ。

新宮町

新宮町は熊野川に沿ひて、其の河口に近く市街をなす。東牟婁郡役所、東牟婁郡警察署、新宮區裁判所の所在地なり。又、郵便電信局あり。人家、多く集まりて、商業、繁昌す。縣社、速玉神社も町の西北に鎮座す。

新宮城の趾

新宮城の趾も町の東にあり。元和五年、水野氏の此の地方を領せし後、修營せし所にして、明治維新の日まで、其の居城となりけり。

堀内氏善

堀内氏善は新宮に住し、威勢、遠近に振ひけり。天正年間豊臣秀吉に降り、朝鮮征伐の時、出陣して軍功を顯せしき。

源行家

源行家と為義の第十男にして、新宮に居り、新宮十郎と称しけり。後、頼朝、義仲、義経等と共に平家を伐ちしことあり。

熊野川

熊野川と大和の國に發源し、西北の堺より本郡に入り、九重村に至りて、北山川の水を合せ、東南へ流れ、新宮町の東に於て海に注ぐ。十数里の間、舟を通ずべし。大和の國の材木と一部ハ紀の川により、一部ハ熊野川によりて、他國に出さるゝなり。

本宮

本宮と熊野川の上流にあり。國幣中社、熊野座神社ふくまに鎮座ず。明治二十二年、未曾有の洪水ありて、社殿、民家、多く流失せしも、今は漸く舊態に復せんとす。此の地より舟を下だして、新宮町に至るべし。水清く、流れ早く、沿岸の地、佳景、多し。其の里程、九里餘なるを以て、世俗、之を九里八町とよぶ。

熊野三山

熊野座神社と昔、那智の熊野夫須美神社、新宮の熊野速玉神社と共に熊野三山と称し、代々の上皇の、屢、行幸ありし神宮にして、社領の如きも、全國、各地に散在して、無双の盛大を極めたりけり。寛治年間、白河上皇の、始めて熊野別當を置き給ひしより、三十一代の間、續きて補任ありけるが、南北朝の頃より、別當補任の事、廢絶して、三山の繁昌も漸く衰へ

湯の峰

湯の峰は本宮の南にあり。著名の温泉場なり。文武天皇を始め奉り、数代の天皇の、行幸ありし地なり。

野頭山等

野頭山及び果無越の連峯は大和の國との堺に列す。大塔の峯は西牟婁郡との堺に聳えて、数多の山脈を發す。其の本郡に來るものは、東に出でゝ妙法山となり、更らに四方に山脈を分つ。小雲取、大雲取、那智の諸山、其の中に抽んづ。

那智の瀧

那智の瀧は那智山の山腹にあり。高さ八十丈に過ぐ。水煙、飛散して近よるべからず。實に海内無双の壯觀なり。縣社、熊野夫須美神社、山中に鎮座す。又、觀音堂あり。

三輪崎等

三輪崎は新宮の南に當り、海に臨みたる村落なり。郵便電信局あり。漁船、しばしば寄港す。天満は那智川の沿岸にあり。其の北に接近したる濱の宮は中邊路、大邊路の出であふ所なり。勝浦は天満の南にあり。船舶を泊するによし。又、郵便電信局あり

太地

太地と海に突出したる地なり。其の東端に太地崎あり。東北の方、勝浦と相助けて海湾を圍む。

和田頼光

太地の舊家、和田忠兵衛頼光、慶長十一年、鯨つきの事を企てしより、其の業、年を逐ひて漸く整頓し、捕鯨の專業となり、土地の繁昌を致したり。

下里

下里は太田川の河口に村落をなす。郵便電信局あり。

古座川

古座川は七川村の山間に發源し、古座浦に至りて海に注ぐ。上流の沿岸、佳景多く、末流舟を通ずべし。古座浦も船舶出入して商業繁昌す。郵便電信局あり。

大嶋

大嶋は古座浦の南海中にあり。周囲、四里を過ぎ、大嶋浦、須江浦、樫野浦の三つに區劃せらる。大嶋浦は西牟婁郡の串本と相對して、海湾を圍み、南海の良港をなせり。内外諸國の船舶、こゝに碇泊して、風候を待つもの多し。樫野浦の岬角に燈臺あり第二等旋轉白色の燈火を點ず。

中邊路

中邊路は本郡の西北隅より來り、本宮、請川を歴、小雲取、大雲取を越えて、濱の宮に達す。

大邊路

大邊路は西牟婁郡より海に沿ひて來り、古座浦神下里、天滿を過ぎ、濱の宮に達し、中邊路と相會し宇久井、三輪崎を歴て、新宮に至る。

職業

郡民は農を業とす。沿海の地に於ては大に漁業を

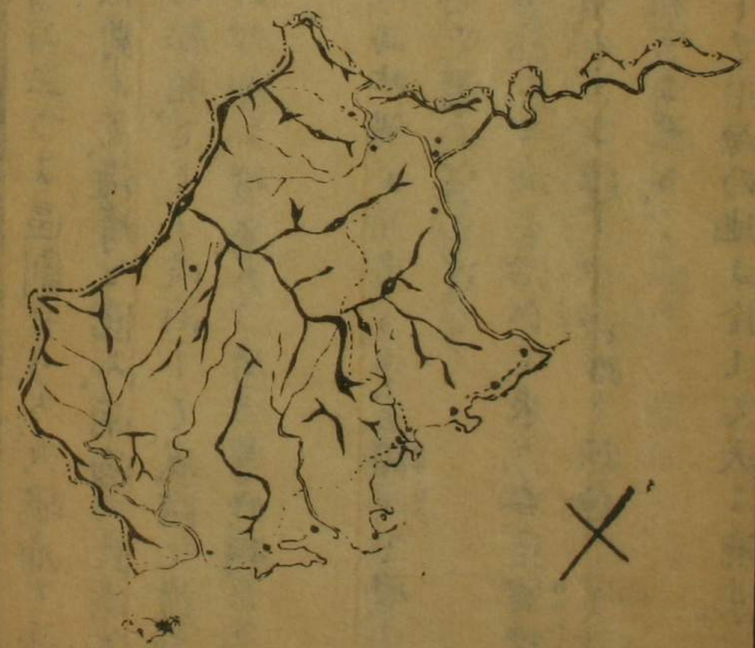
勤む。又捕鯨を業とするものあり。

物産

穀類　甘藷　材木
木炭　海産物
宮井日足の地方の
無煙石炭

―地理の概要―

宮町、本宮、太地、古座
大嶋、湯の峯、那智山、
大塔の峯、熊の川、古座川、



―史談の概要―

源行家（治承年間の人）
島倉天皇　治承元年
千八百三十七年
和田頼光、鯨つきを始む
後陽成天皇　慶長十一年
二千二百六十六年

概要

地面　十万六千百一町八反歩
人口　六万七千七百人餘
地勢　嶮峻
氣候　海邊温和　山地稍や寒冷
職業　農業　漁業
物産　穀類　甘藷　材木　木炭
海産物　無煙石炭
行通　中邊路　大邊路

結論

和歌山縣地理の概要

地面　三十九万四千六百八十四町二反歩
市町村数　一市七町二百二十四村
人口　六十三万人餘
地勢　山脈　葛城山脈　高野山脈　城ヶ森山脈
　　大塔山脈
　　峻嶮
　　川　紀の川　熊野川　日高川
氣候　海邊温和　山地寒冷
海岸線　七十里餘
職業　農業　漁業　工業
物産収入　七百十六万六千圓餘

首要なる輸出物産　和歌山市の綿ワタヲヌル
　東西牟婁郡の材木、木炭、有田郡の蜜柑、
　黒江町の漆器、
地價　二千七百七十七万圓餘

和歌山縣史談の概要

第一　土豪群居
第二　神武天皇の征伐
第三　國造國司の治
第四　守護の治
第五　豪民割據
第六　豊臣秀吉の征伐

第七　諸侯の治

第八　明治の縣治

本縣は二十六万三千三百五十七町九反歩の山林を有し、七十里餘の海岸線を有したれば、住民は宜しく水の種子を蒔つくるか、木の苗を植こむか、木を伐らか、木を出だすか、木皆へをするか、等は就き、油斷なく研究して其の良法を求め、山林の利益を大ならしめざるべからず。又海よも魚介、海藻あれば之を捕獲する法、之を製造する法を改良して益漁業の利益と安全とを進めざるべからず。且、海を軍艦を浮べ、商船を送る便路なれば、常に渡海の法を心得居て海戰、通商の道に於て、名を揚げざるべからず。

本縣は神武天皇の親征ありし以來、屢天皇の行幸ありて、玉趾の親しく國土に臨ませられしこと、多かれば、畏れ多くも、帝室に親しみ深しといふべし。則ち、児童は皆、宜しく忠君の志、拔群なる良民となるべきなり、又、児童は皆、宜しく職業の勤むべき道を知り、以て國土の利益を進め、愛國の心厚き良民となるべきなり。進んで日本地理、日本歴史を學ぶに及び、宜しく此の志を養ひて愈、堅固ならしむべし。

和歌山縣地理史談終

和歌山縣面積及人口

市郡	面積	人口
和歌山市	三四〇、九町反	五五六一五
海草郡	一二三、一二六	一三二二九。
那賀郡	三六一五八、四	八四〇五。
伊都郡	四六四二四、一	五九八一四
有田郡	二三九四七、三	六七九四二
日高郡	七、一〇四七六	八八五四二
西牟婁郡	八、七六五一、五	八五四八。
東牟婁郡	一〇、六一〇一八	六七七〇七

和歌山縣地面明細

總反別	三九、四六八四、二町反
官有地	七、六〇五九、一
民有地	二一、八六二五、一
民有地 田	三、三七九四、五町反
民有地 畑	一、〇三〇〇、八
民有地 塩田	七〇、三
民有地 山林	二六、三三五七、九
民有地 原野	一三七〇、四
民有地 宅地	三二二五、二
民有地 雜地	三八、八
民有地 無地價地	三六六七、二

和歌山縣戶數人口明細

	戶數	人口			
總數	一二、九四〇七	總數	男	六三、一四六〇	
			女	三一、九九九〇	
農	八、一九五七	農	男	三九、五〇八二	
			女	二〇、四〇九〇	
商	一〇一〇五	商	男	四、三六二六	
			女	二、五四四七	
工	四四八二	工	男	一、八二四五	
			女	一、八一七九	
其他	三、一八六三	其他	男	一七、四五〇七	
			女	八、一三五七	
				九、三一五〇	

和歌山縣物產收入	總額	七一六、六〇九二円
	農產物	四六九、一六一〇円
	水產物	七〇、〇〇〇〇
	工產物	一七七、四四八二

和歌山縣公費總額 一五一、四六三七円

國稅		一〇三、九〇四六円
地方稅		二九、九八九六
市町村稅		二五、九〇二八
公儲金		一、六六六七

和歌山縣著名山川

和歌山縣山系	葛城山系	河内和泉兩國トノ堺ヲ走リ小支脈ヲ縣内ニ出ダス
	高野山系	伊都那賀ノ二郡ニ縱横シ
	城ガ森山系	有田日高二郡ノ内ニ起伏ス
	大塔山系	東西牟婁郡ノ内ニ起伏ス
紀ノ川		大和ノ國ヨリ來リ東北ノ四郡ヲ貫流ス
熊野川		大和ノ國ヨリ來リ東牟婁郡ノ東北ノ堺ヲ走ル
日高川		日高郡ヲ回流ス

和歌山縣著名地方

市郡	地名	港	温泉
和歌山市			
海草郡	秋月、黒江、日方、	雄港、大崎、加太	
那賀郡	清水、粉河、		
伊都郡	橋本、妙寺、		
有田郡	湯淺、箕島、廣、	湯淺港、北泰	
日高郡	御坊、南部、	由良、	次ノ瀧
西牟婁郡	田邊、	田邊港、串本	湯崎温泉、龍神温泉
東牟婁郡	新宮、古座、	新宮港、古座港、大島港、那賀ノ瀧	湯ノ峯温泉、那賀ノ瀧

淡路街道

和歌山市ヨリ
北島マデ　二十四丁餘
松江マデ　一里一丁ヨ
加太マデ　一里卅五丁ヨ

大坂街道

和歌山市ヨリ
西田井マデ　一里卅二丁ヨ
川邊マデ　二十七丁ヨ
瀧畑マデ　一里九丁ヨ
是ヨリ大坂マデ十四里

大和街道

和歌山市ヨリ
布施屋マデ　二里廿五丁ヨ
清水マデ　一里十三丁ヨ
東野マデ　二里十五丁ヨ
名手マデ　三十丁ヨ
笠田マデ　卅四丁ヨ
妙寺マデ　一里十四丁ヨ
橋本マデ　二里十三丁ヨ
眞土マデ　一里十四丁ヨ
是ヨリ大和ノ國五條迄二里ヨ
○粉河ヘマワル道
清水ヨリ
粉河マデ　二里十五丁ヨ
名手マデ　二十七丁ヨ

高野街道

紀見峠ヨリ
橋本マデ　二里ヨ
學文路マデ　一里十二丁ヨ
高野マデ　二里卅四丁ヨ
大和街道
○東野ヨリ分カル、道
東野ヨリ
麻生津マデ　一里一丁ヨ
花坂マデ　三里九丁ヨ
高野マデ　一リ廿丁ヨ
大和街道
○笠田ヨリ分カル、道
笠田ヨリ
澁田マデ　十五丁ヨ

花坂マデ　四里餘

龍神街道

和歌山市ヨリ
秋月マデ　三十丁ヨ
淵崎マデ　一里十三丁ヨ
伊太祈曽マデ　十六丁ヨ
動木マデ　二里九丁ヨ
神野マデ　一里十七丁
清水マデ　五里ヨ
龍神マデ　七里廿四丁ヨ

熊野街道

和歌山市ヨリ
三葛マデ　一里廿一丁ヨ
紀三井寺マデ　十二丁ヨ
黒江マデ　廿七丁ヨ
日方マデ　十丁ヨ
名高マデ　十五丁ヨ
塩津マデ　一里十丁ヨ
箕島マデ　二里廿七丁ヨ
湯淺マデ　四里一丁ヨ
由良マデ　三里九丁ヨ
御坊マデ　三里十丁ヨ
印南マデ　二里廿一丁ヨ
南部マデ　三里七丁ヨ
田邊マデ　二里廿二丁ヨ

○中邊路

田邊ヨリ
上三稲マデ　一里廿七丁ヨ
雲稲川マデ　三里卅三丁ヨ
近露マデ　三里十一丁ヨ
湯峯マデ　五里廿一丁ヨ
本宮マデ　廿五丁ヨ
請川マデ　一里卅五丁ヨ
井関マデ　五里廿四丁ヨ
瀬ノ宮マデ　一七丁ヨ
△本宮ヨリ新宮マデ舟行路程アリ九里餘

○大邊路

田邊ヨリ
高瀬マデ　三里卅丁ヨ
周参見マデ　四里一丁ヨ
江住マデ　三里十五丁ヨ
田並マデ　四里十八丁ヨ
古座マデ　三里廿五丁ヨ
浦神マデ　三里七丁ヨ
大滿マデ　三里二丁ヨ
濱宮マデ　八丁ヨ
宇久井マデ　一里廿八丁ヨ
三輪崎マデ　卅三丁ヨ
新宮マデ　一里六丁ヨ

市郡町村大字名

和歌山市ソカヤマシ
番町　バンチヤウ
内町　ウチマチ
宇治　ウヂ
湊　ミナト
吹上　フキアゲ
廣瀬　ヒロセ
新町　シンマチ

海草郡カイサウコホリ
楠見　クスミ
山口　ヤマグチ
川永　カハナガ
直川　ナホカハ
野崎　ノザキ
貴志　キシ
岡町　ヲカマチ

参考諸表

中島 ナカノシマ
岡崎 ノクザキ
三田 サンタ
宮前 ミヤマヘ
西和佐 ニシワザ
巽 タツミ
紀伊 キイ
松江 マツエ
四箇郷 シカゴウ
和佐 ワザ
安原 ヤスハラ
日方 ヒカタ
内海 ウツミ
大野 オホノ
有功 イサヲ
宮 ミヤ
鳴神 ナルカミ
紀三井寺 キミイデラ
亀川 カメカハ
黒江 クロエ

西嶽 ニシサトウ
東嶽 ヒガシサトウ
名手 ナテ
王子 ワウジ
狩宿 カリシユク
川原 カハラ
禾本 キノモト
西脇野 ニシワキノ
加太 カダ
雑賀 サイカ
和歌 ワカ
雑賀崎 サヒガサキ
湊 ミナト
加茂 カモ
大井 オホサキ
塩津 シホツ
濱中 ハマナカ
椒 ハジカミ
仁義 ニンギ
那賀郡大ボリ
池田 イケダ
長田 ナガタ
粉河 コカハ

南野 ミナミノカミ
東野上 ヒガシノカミ
北野 キタノカミ
小川 ヲガハ
上神野 カミカウノ
下神野 シモカウノ
狭川 サルカハ
長谷毛原 ハセケハラ
真国 マクニ
吉賀野 シガノ
細野 ホソノ
鞆淵 トモブチ
伊都郡イトコボリ
笠田 カセダ
大谷 オホタニ
四郷 シガウ
妙寺 メウジ
名倉 ナグラ
信太 シノダ
應其 オウゴ

端場 ハバ
山田 ヤマダ
岸上 キシウヘ
橋本 ハシモト
紀見 キミ
隅田 スダ
富貴 フキ
戀野 コヒノ
高野 カウヤ
學文路 カムロ
九度山 クドヤマ
河根 カネ
見好 ミヨシ
花園 ハナゾノ
天野 アマノ
有田郡アリタボリ
宮崎 ミヤザキ
宮原 ミヤハラ
系我 イトガ
保田 ヤスダ

湯浅 ユアサ
廣 ヒロ
田栖川 タスカハ
南廣 ミナミヒロ
津木 ツギ
田殿 タドノ
藤並 フヂナミ
生石 ウイシ
御霊 ゴリヤウ
石垣 イシガキ
岩倉 イハクラ
五西月 ゴサイ
鳥屋城 トヤジヤウ
安諦 アデ
八幡 ヤハタ
城山 シロヤマ
五 ゴ
日高郡ヒダカボリ
衣奈 エナ
白崎 シラサキ

由良 ユラ
志賀 シガ
北井崎 ヒキヰザキ
三尾 ミヲ
和田 ワダ
東内原 ヒガシウチハラ
西内原 ニシウチハラ
御坊 ゴバウ
湯川 ユカハ
塩屋 シホヤ
野口 ノグチ
松原 マツバラ
矢田 ヤタ
早蘇 ハヤソ
丹生 ニフ
藤田 フヂタ
船著 フナツキ
川上 カハカミ
川中 カハナカ
中山路 ナカサンヂ

下山路 シモサンヂ
上山路 カミサンヂ
龍神 リウジン
寒川 サムカハ
印南 インナミ
名田 ナダ
稲原 イナハラ
鹵部 ミナベ
上南部 カミミナベ
清川 キヨカハ
高城 タカギ
岩代 イハシロ
切目 キリメ
切目川 キリメガハ
西牟婁郡
ニシムロコホリ
下芳養 シモハヤ
中芳養 ナカハヤ
上芳養 カミハヤ
下秋津 シモアキツ

上秋津 カミアキツ
秋津川 アキツガハ
田邊 タナベ
湊 ミナト
西の谷 ニシノタニ
稲成 イナリ
新庄 シンジヤウ
瀬戸鉱山 セトカナヤマ
鶴呂 マロ
三栖 ミス
長野 ナガノ
栗栖 クルスガハ
二川 フタカハ
朝來 アスソ
生馬 イクマ
岩田 イハタ
市ノ瀬 イチノセ
鮎川 アユカハ
東富田 ヒガシトンダ
南富田 ミナミトンダ

西富田 ニシトンダ
周参見 スサミ
日置 ヒキ
大都河 オホツカハ
川添 カハゾヘ
三鮮 ミマ
江住 エスミ
和深 ワフカ
田並 タナミ
有田 アリタ
串本 クシモト
潮岬 シホミサキ
富一橋 フヂハシ
富里 トミサト
近野 チカノ
豊原 トヨハラ
三川 ミカハ
東牟婁郡
ヒガシムロコホリ
大島 オホシマ

西向 ニシムカヒ
古座 コザ
高池 タカイケ
田原 タハラ
明神 メウジン
色川 イロカハ
三尾川 ミトカハ
小川 コカハ
七川 シチカハ
佐本 サモト
下里 シモサト
太地 タイジ
上太田 カミオホタ
下太田 シモオホタ
勝浦 カツウラ
那智 ナチ
三輪崎 ミワザキ
宇久井 ウグヰ
新宮 シングウ
三津ノ ミツノ

高田 タカタ
小口 コグチ
請川 ウケカハ
敷屋 シキヤ
本宮 ホングウ
四ヨ
三里 ミサト
九重 クヂユウ
玉置口 タマギクチ
北山 キタヤマ

和歌山市中橋小路
宮井宗兵衛
寄贈

明治二十八年二月十七日印刷
同年同月同日発行
同年六月八日
同年七月十日
同年十一月十三日訂正再版印刷
同年十二月廿一日
同年十二月十五日訂正三版印刷
同年三月廿五日四版発行

版權所有

今

發行兼印刷者　宮井宗兵衛
和歌山縣和歌山市新通二丁目一二番地

著作者　坪井仙次郎
京都下京區堀川通蛸薬師下ル菊屋町壹番壹號

發賣所　宮井支店
和歌山縣和歌山市新通二丁目二十番地

宮井出張店
和歌山市中橋九軒